

# やまなし

宮沢賢治

青空文庫



小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈げんとうです。

一、五月

二足ひきの蟹かにの子供らが青じろい水の底で話していました。

『クラムボンはわらったよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

『クラムボンは跳はねてわらったよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

上の方や横の方は、青くくらくはがね鋼はがねのように見えます。そのなめ

らかな天<sup>てんじょう</sup>井を、つぶつぶ暗い泡<sup>あわ</sup>が流れて行きます。

『クラムボンはわらつていたよ。』

『クラムボンはかぷかぷわらつたよ。』

『それならなぜクラムボンはわらつたの。』

『知らない。』

つぶつぶ泡が流れて行きます。蟹の子供らもぽっぽっぽつとつづけて五六粒泡<sup>つぶ</sup>を吐<sup>は</sup>きました。それはゆれながら水銀のように光<sup>なな</sup>つて斜<sup>なな</sup>めに上の方へのぼって行きました。

つうと銀のいろの腹をひるがえして、一疋の魚が頭の上を過ぎて行きました。

『クラムボンは死んだよ。』

『クラムボンは殺されたよ。』

『クラムボンは死んでしまったよ………。』

『殺されたよ。』

『それならなぜ殺された。』兄さんの蟹は、その右側の四本の脚あしの中の二本を、弟の平べったい頭にのせながら云いいました。

『わからない。』

魚がまたツウと戻もどって下流のほうへ行きました。

『クラムボンはわらったよ。』

『わらった。』

にわかにパツと明るくなり、日光の黄金きんは夢ゆめのように水の中に降おって来きました。

波から来る光の網が、底の白い磐の上で美しくゆらゆらのびたりちぢんだりしました。泡や小さなごみからはまつすぐな影の棒が、斜めに水の中に並んで立ちました。

魚がこんどはそこら中の黄金の光をまるつきりくちやくちやにしておまけに自分は鉄いろに変に底びかりして、又上流の方へのぼりました。

『お魚はなぜああ行ったり来たりするの。』  
弟の蟹がまぶしそうに眼を動かしながらたずねました。

『何か悪いことをしてるんだよとってるんだよ。』

『とってるの。』

『うん。』

そのお魚がまた上流かみから戻って来ました。今度はゆっくり落ちついて、ひれも尾おも動かさずただ水にだけ流されながらお口を環わのように円くしてやって来ました。その影は黒くしずかに底の光の網の上をすべりました。

『お魚は……。』

その時です。俄にわかに天井に白い泡がたつて、青びかりのまるでぎらぎらする鉄砲弾てっぽうだまのようなものが、いきなり飛込とびこんで来ました。

兄さんの蟹ははつきりとその青いもののさきがコンパスのように黒く尖とがっているのも見ました。と思ううちに、魚の白い腹がぎらつと光つて一ぺんひるがえり、上の方へのぼったようでしたが、それつきりもう青いものも魚のかたちも見えず光の黄金きんの網はゆ

らゆらゆれ、泡はつぶつぶ流れました。

二疋はまるで声も出さず居すくまってしまいました。

お父さんの蟹が出て来ました。

『どうしたい。ぶるぶるふるえているじゃないか。』

『お父さん、いまおかしなものが来たよ。』

『どんなもんだ。』

『青くてね、光るんだよ。はじがこんなに黒く尖ってるの。それが来たらお魚が上へのぼって行ったよ。』

『そいつの眼が赤かったかい。』

『わからない。』

『ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かわせみと云うんだ。』

大<sup>だいじ</sup>



丈夫だ、安心しろ。おれたちはかまわないんだから。』

『お父さん、お魚はどこへ行ったの。』

『魚かい。魚はこわい所へ行った』

『こわいよ、お父さん。』

『いいいい、大丈夫だ。心配するな。そら、樺かばの花が流れて来た。

ごらん、きれいだろう。』

泡と一緒いっしょに、白い樺の花びらが天井をたくさんすべって来ました。

『こわいよ、お父さん。』弟の蟹も云いました。

光の網はゆらゆら、のびたりちぢんだり、花びらの影はしずかに砂をすべりました。

## 二、十二月

蟹の子供らはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすつかり変りました。

白いやわら柔かなまるい円石もころがって来、小さなきり錐の形の水すいし晶の粒や、きんうんも金雲母のかけらもながれて来てとまりました。

そのつめたい水の底まで、ラムネの瓶びんの月光がいっぱいすきに透っており天井では波が青じろい火を、燃したり消したりしているよう、あたりはしんとして、ただいかにも遠くからというように、その

波の音がひびいて来るだけです。

蟹の子供らは、あんまり月が明るく水がきれいなので睡ねむらないで外に出て、しばらくだまって泡をはいて天上の方を見ていました。

『やっぱり僕ぼくの泡は大きいね。』

『兄さん、わざと大きく吐いてるんだい。僕だってわざとならもつと大きく吐けるよ。』

『吐いてごらん。おや、たったそれきりだろう。いいかい、兄さんが吐くから見ておいで。そら、ね、大きいだろう。』

『大きないや、おんなじだい。』

『近くだから自分のが大きく見えるんだよ。そんなら一緒に吐い

てみよう。いいかい、そら。』

『やっぱり僕の方大きいよ。』

『本当かい。じゃ、も一つはくよ。』

『だめだい、そんなにのびあがっては。』

またお父さんの蟹が出て来ました。

『もうねろねろ。遅いぞ、あしたイサドへ連れて行かんぞ。』

『お父さん、僕たちの泡どっち大きいの』

『それは兄さんの方だろう』

『そうじゃないよ、僕の方大きいんだよ』弟の蟹は泣きそうになりました。

そのとき、トブン。

黒い円い大きなものが、天井から落ちてずうっとしずんで又上へのぼって行きました。キラキラツと黄金きんのぶちがひかりました。

『かわせみだ』子供らの蟹は頸くびをすくめて云いました。

お父さんの蟹は、遠めがねのような両方の眼をあらん限り延ばして、よくよく見てから云いました。

『そうじゃない、あれはやまなしだ、流れて行くぞ、ついて行って見よう、ああいい匂においだな』

なるほど、そこらの月あかりの水の中は、やまなしのいい匂いでいっぱいでした。

三足はぼかぼか流れて行くやまなしのあとを追いました。

その横あるきと、底の黒い三つの影法師かげぼうしが、合せて六つ踊おどる

ようにして、やまなしの円い影を追いました。

間もなく水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青い焰ほのおをあげ、やまなしは横になって木の枝えだにひっかかってとまり、その上には月光の虹にじがもかもか集まりました。

『どうだ、やっぱりやまなしだよ、よく熟している、いい匂いだろう。』

『おいしそうだね、お父さん』

『待て待て、もう二日ばかり待つとね、こいつは下へ沈しずんで来る、それからひとりでおいしいお酒ができるから、さあ、もう帰って寝ねよう、おいで』

親子の蟹は三足自分等らの穴に帰って行きます。

波はいよいよ青じろい焰をゆらゆらとあげました、それは又金こん  
剛石こんごうせきの粉をはいているようでした。

\*

私の幻燈はこれでおしまいであります。





# 青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

初出：「岩手毎日新聞」岩手毎日新聞社

1923年（大正12年）4月8日

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年4月15日作成

2013年7月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# やまなし

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>